
シュガーレス・ゼファーナ

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュガーレス・ゼファーナ

【Nコード】

N9848F

【作者名】

スグル

【あらすじ】

謎の組織『アンチヒューマンズ』が作り上げた、戦闘用衣類兵器『ファンタジスタスーツ』により混乱する現在社会。組織に反発する集団『地獄同盟会』に所属する少年、ゼファーナ春日は、世界に希望を見出だそうと戦うが…。※かなりの不定期連載です。

Flash:0 「イントロ」(42.5) (前書き)

本編には暴力などの描写、多少含まれております。

Flash:0 「イントロ」(42.5)

春先の高校の校舎裏。

そこで、一人の少年が複数の少年達に殴られていた。顔ではなく、腹を何度も何度も蹴られ、殴られていた。胃液ではなく、血反吐が口から出た。

少年は頭や腹部を抑え、唇を強く噛み締め耐える。

「金、持って来いって、昨日、言ったじゃねえかよ!」

「また、中学んときみたいになされてえのか!? 眼鏡叩き割るぞ!」

少年が落とした眼鏡を、誰か一人が踏み付けて壊した。

「持って来れねえなら、死ね!」

その言葉を最後にして、気を済ませた彼らは、最後に少年に唾を吐きかけて去った。

殴られ朽ち果てた少年は、腹部を抑えて苦しんだ。

自分の惨めさ、出口の苦しさ、なにも出来ない恐怖。それらすべてが、涙になって目から溢れ出す。

傷が刻まれた左手で、粉々に砕け散った眼鏡を探す。その破片が、指に突き刺さる。

血が溢れた。

ついさっき、彼らに否定された自分から血が流れた。

春先の冷たい小川に、少年は身を捨てた。

とても深く薄暗い。空気がなく、体温が奪われる。体中が水に支配された。

生まれたときから、両親に捨てられた。

施設に預けられた。

小学生の時に、誰も自分と手を繋いでくれなかった。

中学の修学旅行は行かなかった。自分をねじ込まされたグループから、邪魔だという視線を受けたから。

初めて、手首を切った。自分の血が多く流れて怖くなって止血した。

だから、死ぬのは怖くなかった。

悔しかったが…。

目を閉じると、更に暗闇が広がる。

少年は最期に思う。

（俺…、生まれて来なかった方が良かったんだ…）

そんな時、左手に温もりを感じた。体温どころか、命を奪う冷たい水の世界で。

思わず、少年は目を開く。誰かが、自分の左手を握っている。この冷たい世界で。

.....

それから、数年後…。

夜になっても輝く高層ビルの屋上に、少年の姿はあった。

月に背を向け、少年は黒いボディースーツを着て、手足には黒い手袋に、ブーツ。そして、鮮血のように赤いマフラーを首に巻く。

手に握られた複雑な曲線の黒く硬質な仮面が月の灯りで鈍く光り、

17歳の素顔に重なった瞬間…、カツ！と、マスクの眼部が白く光った。

「ゼファーナ春日、シュガーレスのシステム…、起動…」

少年はマスクの奥の眼光を光らせ、ビルの屋上から翔んだ。

漆黒になった姿は、赤いマフラーをなびかせ、光輝く街の中に溶け込んで行った…。

Flash:0 「イントロ」(42.5) (後書き)

.. 本作品は、同作者の『漆黒のシュガーレス』からの連続した物語であり、続きであります。本作品と『漆黒のシュガーレス』も読まれれば幸いです。

Flash:01 「シュガーレス、浮上」(43)

「信じられませんか…。着るだけで、スーパーマンになれる服なんて…」

新米の鈴木刑事の恐縮気味な声に、ベテランの山田刑事は、ため息をついた。

昼下がりの覆面パトカーの中。さっき、ファーストフード店で買ったハンバーガーで食事を摂る二人の手に、上層部から渡された資料があった。

本日から、謎の組織『アンチヒューマンズ』の対策本部に配属された2人は、資料に書かれている現実離れた内容に驚きが隠せなかった。

「ファンタジスタスーツって名前だ、そのスーパーマンになれる夢のスーツは…」

資料に書かれた兵器の名前を読み上げながら、山田刑事は、押収されたファンタジスタスーツと言われる衣類の写真を見つめる。2人とも、こんな布切れが、人間の肉体を強化するなんて…、と目を疑う。

いきなり知らされたファンタジスタスーツにざわつく鈴木刑事を煙たがりながらも、山田刑事もアンチヒューマンズと言う組織の非現実さに驚愕していた。だが、ベテランとしての建前、どっしりと座席に構え、口にハンバーガーを入れる。

「今じゃあ、誰彼でも持ってる携帯電話ですら、俺がガキの頃は、SF小説に出てくるような道具だったんだ…。今の時代、こんな非現実な服が出るくらい、当たり前なのかもな」

「さすがー、山田さんー」

その貫禄ある態度を、純粹に受け取る鈴木刑事は感動し、そんな彼を、ふん…、と山田刑事は鼻で笑った。

20XX年、日本の都心を中心にした関東地区の裏側を巢食う、謎の兵器組織『アンチヒューマンズ』は、着衣するだけで人体を常識の超えた領域に導くスーツ型兵器を開発した。名は、『ファンタジスタスーツ』。世界すら破壊しかねない、人類史上最も凶悪な兵器だ。

ファンタジスタスーツの登場は、裏側から世界を狂わせた。銃刀に頼らない、肉体そのものを強力、圧倒的、確実な暴力に変化させた故に、裏世界の均衡は崩壊。より強力な暴力達が、裏世界を支配。ファンタジスタスーツは、人々の肉体に暴力を宿すだけではなく、悪意を駆り立てた。その悪意が、徐々に社会のルールを食い潰す。アンチヒューマンズ、ファンタジスタスーツによる暴走が、静かに始まった現在社会。それ故に、警察が動くのは必然だった。

「しかし、妙ですね？」

資料と口元をケチャップで汚しながら、鈴木刑事は疑問の表情を浮かべた。

「なんで、こんな恐ろしい兵器が、裏だけに回り、表に出ないんでしょうか？というか、なんで、このファンタジスタスーツで世界征服とかしないんでしょうかねー」

ケチャップだらけの口元といい、的を得ているが、その子どもじみた鈴木刑事の発想に山田刑事は呆れていた。

「なんか、理由があるからだろうが……。その理由が解らないから、こうして、対策本部があってな……」

呆れた顔をしながら、長々と話をする山田刑事を横に、サイドミラーで自分がケチャップだらけなのに気付いた鈴木刑事は、急いで口元を車内にあったティッシュで拭く。

「まあ、奴らが世界征服しないのは、邪魔する奴らが居るからじゃねえか……？ 仮面ライダーや、ゴレンジャーみたいな……、ハハハ！」

山田刑事は笑いながら、ハンバーガーを食べ終えた。

深夜、都内某所にある陸橋の下。そこは金髪や茶髪に髪の毛を染めた集団の溜まり場であり、そこでは、派手な飾りや塗装した車、バイクが数台、エンジンを騒がせていた。

彼らは、この地では有名な暴力集団。犯罪を何度も起こしては繰り返し、麻薬にも手を染め、裏の人間達の息もかかっている。

しかし、今日の集まりは、いつもとは違っていた。

リーダー格の谷田部という長身の長髪の男は、集団の中心に立ち、タバコに火を着ける。

「例の『ブツ』が手に入った……」

一言、谷田部は皆に告げる。

この言葉に、メンバー達は揺れた。

1人のメンバーが手を震わせながら、谷田部に声を掛ける…。

「谷田部さん、もしかして…、噂に聞いてた…、あの…」

これに対し、谷田部はタバコをくわえ、妙な笑みを口元に浮かべる。

そして、右の親指を立て、後ろに停車させている黒いワゴンを指し、皆の視線を集めた。

「ああ、車に積んである…。あのファンタジスタスーツがな…！」

この谷田部の声に、皆、爆発したかのように、狂気が入り交じる歓喜の叫びを上げる。

誰もが、ワゴン車に我先にと突進して行く。ガラスをむしり壊し、ドアを開けずに殴り壊す。

狂ったかのように、ワゴン車に群がる集団を脇目に谷田部は邪惡な笑みを浮かべる。

「これで…、俺達は…。ヒヤハハハハ…！」

谷田部は、月に向けて、タバコを吐き捨て笑った。

「ありやつ…、ありやつ…、やばつ…！なんで…」

深夜のコンビニで、ゼファーナ春日少年は焦る。かすがレジの前に、弁当とお茶を置いたまでは良かったが、ポケットに肝心の財布が入っ

ていなかった。

店員の冷たい眼差しを受け、後ろに並んでいる若い男から、早くしろよ、と檄を飛ばされた。

ゼファーナ春日は、ハハハ…、と笑ってごまかしながら、ポケットを探るが財布はなかった。

弁当をあきらめ、ゼファーナはコンビニから出て、歩いてきた道に戻る。

「おかしいな…、出るときに財布は持ってたんだが…」

ズレた眼鏡を直しながら、ゼファーナは財布を最後に見た時まで記憶を辿るが、どうにも財布は見つからない。長めのクセっ毛の髪の毛を触りながら、財布を探す。

まいったな…、と財布の中にあるキャッシュカードや、スーパー、薬局などのポイントカードのことについて頭を悩ませた。

バコンッ！

それは、嘘みたいな力だった。

リーダーの谷田部が手に入れた服を試しに着たメンバーの一人が、車のバンパーを素手で殴った瞬間、大きな衝撃が生まれた。まるで宇宙から隕石が落下したように凹みがバンパーに残る。

ファンタジスタスーツという名の服が、メンバーの一人の肉体に力を与えた。そんな彼の手は震えた。周囲に居る仲間達も、その力に驚き、声を上げる。

灰色の全身タイツとマスクを着たことにより、身体中の血液はほとぼしり、神経は鋭く研ぎ澄まされ、骨や筋肉、脳にはビキビキと

電気のような刺激が走り、驚異的な力を漲らせる。

これが、ファンタジスタスーツから生まれる暴力。

そして、アンチヒューマンズは、これを生み出した。

「うおおおおお!!!」

ファンタジスタスーツを纏いながら、男は叫んだ。

そんな彼を見つめて、谷田部はタバコを一本、口に与える。

「暴れてこい…。とりあえずは、お前、一人でな…」

一つの強力な暴力が、その言葉により放たれた。

ファンタジスタスーツの暴力が奔り出した都内近郊の駅前。さすがに、深夜だけあって、酔っ払いの姿はあるものの、ひっそりと静かだ。

そんな場所にある深夜も営業しているレストラン。コーヒーや、アロマが香る店内の一室のテーブル。そこでは、妙な空気が流れていた。

「ああ…。情報があつた…。バカ方面で有名なバカ共が、バカなやり方で、ファンタジスタスーツのバカな取り引きをしたんだろ…。まったく、馬鹿馬鹿しい…」

切れ長で澄んだグリーンの瞳を閉じながら、夏海アルゼは椅子に深くミルクティーを飲む。

同じ席に座る秋羽隼、冬風カタナの二人は、その端麗な容姿に似合うのか、似合わないのか解らない彼女のキツイ言い草に耳を傾け

た。スキンヘッド頭の秋羽隼は口をピクつかせ、妙な着物姿の冬風カタナは皿にあるステーキに舌鼓を打つ。

「バカとゴキブリの動きは解らないが…、ファンタジスタスーツはすべて排除する…」

ミルクティーを置いて、アルゼは瞳を大きく開く。

秋羽隼はケツ！と口を歪ませ、テーブルに脚を置き腕を組む。食事中に脚を置くな、マナー違反だ！と、口にステーキを含みながら、冬風カタナは彼を注意した。

ファンタジスタスーツを纏った暴力集団の一人は、その力を試すかのように、陸橋から街中へ。街中を駆け巡る。

車やバイクのような力が、自分の脚から生まれ、ごちゃごちゃした建物の間を駆けていることに、男は感動した。

駆けながら、たまたま、道にあったゴミ箱を素手で殴り壊す。花火のように、生ゴミが散る。

「最高だぜ！最高！」

この着るだけで超人になれるファンタジスタスーツに、男は興奮と感動を味わう。

しかし、男は一つだけ、気になった…。

（何故、谷田部さんは、俺だけ…）

ファンタジスタスーツを大量に手に入れたなら、何故、みんなで派手にやらずに、俺にだけ…。そんな疑問も生まれたが、ゴミ箱を

破壊した爽快感に掻き消された。

男は拳を握り締め、わなわな…、と体を震わせる。

（この力で、人を殴ったら…）

ファンタジスタスーツに刺激される肉体が、男の狂気を目覚めさせた。

光るネオン街の下に、携帯電話を握る鈴木刑事の姿があった。

「ごめん！今日は、仕事でさ…」

今日は会う約束があったが仕事で無理になり、電話の向こうに居る彼女に謝っていた。尻に敷かれてるらしく、ヘコヘコと謝っていたら電話をブチ切られた。

はぁー、と鈴木刑事はため息を吐く…。

「こりゃあ…、バッグでも買わんと、許してくれんな…。始末書よ、彼女の方が怖いよ…、まったく…」

携帯電話を懷にしまい、とぼとぼと歩く。

とりあえずは夜食を買おうと、近くのコンビニに入ろうとしたときに、道端でなにかを探している少年の姿があった。財布をなくし焦るゼファーナ春日だ。

鈴木刑事は、彼の元に近寄る。

「少年！こんな夜中になにしてる！」

その声に、ゼファーナは驚いた。

「あつ、いや財布なくしちゃって…」

「なに？どんな財布？」

真面目そうな容姿だから、彼は不良ではないなと思い、鈴木刑事は一緒にあって財布を探すことにした。

ゼファーナは、軽く頭を下げた。

「すみません…」

「見つからなかったら、交番に行ったか盗まれたかもな…」

その鈴木刑事の言葉に、ゼファーナは財布にある菓子パンの皿プレートのカンペーンのために貯めたシールが…、と不安になった。

しばらく、財布を探していると…。

ドサツ…、ドサツ…。

なにか、二人とは別方向から妙な足音が聞こえた。

鈴木刑事と、ゼファーナは財布を探す手を止めて、足音の方に首を向ける。

「また見つけた…、いい具合に殴りやすそうなのが…」

二人の目の前に、手を真っ赤に染めたあの灰色のファンタジスタスーツの男が現れた。

「!？」

鈴木刑事は、目を疑い立ち上がる。昼間に見た資料にあった、あの肉体を強化する衣類型兵器……。あのアンチヒューマンズが作ったファンタジスタスーツだと。

鈴木刑事は腰にある拳銃を手に取り構え、ゼファーナ春日は立ち上がった。

（簡易型……！アルゼから聞いた情報通り……。財布落としたのは、予想外だったが……）

特に驚く様子を見せないゼファーナは、冷静に現れたファンタジスタスーツを見極める。奴の手が赤くなっているのは、途中、被害を出したということだと……。

ファンタジスタスーツに銃を向けながら、鈴木刑事は叫ぶ。

「少年！早く逃げ……」

言われる迄もなく、ゼファーナは、すぐ様に走り出し、この場から逃げた。あまりの対応の早さと、取り乱した様子もなく走り出す彼に鈴木刑事は、えっ！？と驚いた。

しかし、その間に、ファンタジスタスーツの力に酔いしれる男は、鈴木刑事に向かう。

来るな！と鈴木刑事は叫ぶが、安全弁が外れていない拳銃は弾を放てなかった

「あれ！？なんで！」

鈴木刑事は安全装置を解除していないのに気付かずに、迫り来るファンタジスタスーツの男に恐怖する。

「間拔けな刑事が！」

男は拳銃を握る刑事の腕を蹴った。
バキボキ！と鈴木刑事の腕が複雑に折れ、拳銃が宙に舞う。割れた骨が皮膚を突き破っていた。

鈴木刑事は絶望と恐怖の叫びを上げた。

「これが、ファンタジスタスーツ…！」

「ひやはははは！グッチャグッチャにしてやる！」

男は片腕を振り上げ、鈴木刑事の顔に狙い定めた。
すると、目をつぶる鈴木刑事の顔に生ぬるい液体が飛び散った。

「えっ？」

ファンタジスタスーツを手に入れた男は、振り上げた右手から生ぬるいなかが吹き出しているのに気付いた。

目を向けると、右手に刃渡りの短い刀が突き刺さっていた。吹き出している生ぬるいなかは、裂けたファンタジスタスーツと皮膚から飛び出す自分の血だった。

「うわああああ！！」

男は気付いたときには、遅かった。

自分の背後に、誰か居る。

急いで、振り向くと、いつの間にか背後には黒い仮面と黒いスーツを身に付けた赤いマフラーの男が立っていた。間違いなく、男に奇襲したのは彼だ。

これには、男だけでなく、鈴木刑事も驚く。

「誰だ!？」

黒い仮面の男は、無言だった。

だが、構いもせずに、男は鈴木刑事が落とした銃を左の手で拾い上げ、安全弁を外して、黒い仮面に向けた。

しかし、動じることなく、黒い仮面は、引き金を引こうとする手を蹴り上げる。

「ぐおっ！」

また拳銃が宙に舞い、地面に転がる。

明らかに、この男のファンタジスタスーツより速く強烈な蹴りだった。

このことから、男や鈴木刑事は、黒い仮面の姿に気づいた。

「まさか! てめえも、ファンタジスタスーツ…」

黒い仮面は蹴り上げた足を元に戻した。

「そんなことより、急所を外してやったんだから…、感謝してもらいたい…」

神経を逆撫でる黒い仮面の言葉に、男はキレた。

同時に、鈴木刑事は仮面の男の声にハッ! と反応した。仮面の声は若い男の声だが、聞き覚えがあった。

「ふざけやがって!!」

右肩に突き刺さる刀を抜いて、男は黒い仮面に刃先を向ける。
しかし、あくまで、冷静に無機質に仮面は動く。

まずは、男が縦に突っ込んでくるのを横に避けた。
そして、次はすれ違い様に、男の顔を手を走らせ、簡単にマスクを剥ぎ取った。

「えっ!?!」

マスクが剥がれると、男の身体から急にさっきまで溢れていた力がなくなり、刀の突き刺さった右手に強烈な痛みが走り始めた。
ただの人間に戻ってしまったのだ。

「ぐわあああああ!?!」

右手の痛みに、男が怯んだ瞬間、黒い仮面は男の首の付け根を軽く殴った。

ボタン!と男は気を失い、握っていた刃物と共に地面に落ちた。

「なんだ…、こいつは…」

痛みの麻痺した腕を抱えながら、鈴木刑事は黒い仮面に怯えた。
あの一連の手慣れた動作と冷静さ、明らかに人間技ではない力と速さ。

黒い仮面は血に染まった刀を拾い上げ、鈴木刑事に目を向ける。
そして…。

「今、見たのは忘れろ…」

黒い仮面は倒れた男を肩に乗せて、この場から、去ろうとしたとき、鈴木刑事はギリギリと歯を食い縛り叫ぶ。

「待て!! 貴様は!! なんなんだ、ファンタジスタスーツてのは!

！なにが狙いだ！！」

しかし、黒い仮面は足を止めずに、こう告げる。

「シュガーレス…。シュガーレスだ…。俺の名は…」

この言葉を残して、黒い仮面は男を抱え、大きくジャンプして建物の屋根に飛び移って行き、姿を消した。

鈴木刑事は黒い仮面を目で追ったが、麻痺していた腕に痛みが宿り、意識を失った。

男を抱えながら、シュガーレスと名乗った黒い仮面は、途中、道端でなにかを発見し目を向けた。

「あっ、俺の財布…」

西陣織りの布の財布が、電柱の影にポツンと落ちていた。

Flash:02 「地獄の4人」(44)(前書き)

登場人物・・夏海アルゼ：地獄同盟会のリーダー的な冷酷少女・
秋羽隼：地獄同盟会メンバーの元ヤンキー・冬風カタナ：地獄同
盟会メンバーの謎の多い古風な男・ゼファーナ春日：地獄同盟会
メンバーの本編の主人公・鈴木正すずき まさよし：アンチヒューマンズを追う新
米刑事。

Flash:02 「地獄の4人」(44)

「本当なんですよ！本当に、黒い仮面のファンタジスタスーツに助けられたんですよ！」

「わかった…、わかった…。安静にしろ…」

早朝、病院のベッドに横たわりながら、右腕にギブスを巻いた鈴木刑事が叫ぶ。相変わらず、煙たそうに鈴木刑事の相手をする山田刑事。

先日のは事件は、この鈴木刑事の怪我と、コンビニ近くの現場に残る男の血痕から、現場検証を行っていた。

そして、鈴木刑事の証言から、あの二人のファンタジスタスーツが戦ったことから敵対する関係あることと、ファンタジスタスーツはマスクを脱がされると常人に戻ることがわかった。

だが、鈴木刑事は、あの黒い仮面が『シュガーレス』と名乗ったことについては話さなかった。たぶん、誰も信じないと思うし、自分でも信じられないことだったから。

ふと、鈴木刑事の頭に、財布を落とした眼鏡の少年が思い出された。

(あの少年、やけに冷静に逃げたな…)

財布は見つかったのだろうか、鈴木刑事は思いながら、病院の枕に頭を落として目をつぶる。

山田刑事が、なにかを思い出したようにして口を開いた。

「そーいや、預かったお前の携帯にメールが一件あったぞ。さようなら、と書かれていたが…」

「勝手に見ないでくださ…、って、ウソ!!!」

ベッドから起き上がって、鈴木刑事は彼女と別れた現実にはショックを受けた。

「谷田部さんの言うとおりでしたね……。あれから、奴からの連絡はありません……」

ファンタジスタスーツを手に入れた谷田部率いる暴力集団、『アンサーズ』のアジトの廃ビル。そこに、高級ソファーにもたれ、酒を食らう谷田部の元に、部下が一人居た。

谷田部はタバコを吸いながら、話し始めた。

「ファンタジスタスーツの取り引き相手から、聞いてたからな……。『地獄同盟会』の存在を……。だから、まずは一人だけ捨てゴマにして正解だった……」

「『地獄同盟会』？」

聞いたことのない名前に、部下は目をパチクリさせた。

谷田部は、テーブルにあるウィスキーを手取る。

「ファンタジスタスーツを悪用する輩を排除する……。正義の集団とこか……。アンチヒューマンズ最大の敵で……。今までだって、黒い噂のあった『一文字クラブ』、ファンタジスタスーツを取り扱う闇商売の『スリーピング』の精鋭刺客を滅ぼした……」

そう言いながら、ぐびぐびと谷田部はウィスキーを飲む。

「しかし、俺たち、アンサーズはどうか……？」

笑いながら、谷田部は空になったビンを投げ捨てた。
彼を予測していたのだ…。地獄同盟会と言う名の集団が動くことを。

だから、彼はすでに手を打っていた。

「奴らは知らないだろうな…。俺たちが、組織から頼まれ事をされたこと…。その頼まれ事を、すでに果たしたことに…」

谷田部は不敵に笑う。

彼の不気味な笑顔は、砕け散ったガラスの破片に映った。

とある自動車修理工の朝礼。事故や怪我を起こさないようにと工事長が話し終わると…。

「すみません、工事長…。あの秋羽のアホんだらが、まだ来てません…」

オールバックで長身の整備士、轟が手を挙げて、社員の一人が遅刻しているのを告げた。それを聞くと、周囲がまたか…、と泡立ち、工事長が頭を抱える。

「あのワルガキ…」

元ボクサーの工事長が拳をゴキゴキと鳴らしながら、歯を食い縛る。

噂をすると、平然とスキンヘッドの秋羽隼が職場に現れた。

「ちよりっす」

まだ作業着に着替えてもいないで、ダルそうに挨拶する彼に、工事が挨拶代わりにパンチを放つ。

しかし、隼は普通に避ける。元ボクサーのパンチを。

「なにすんですか？ 工事長！ 今、二日酔いで…」

「うるせえ！！ 何回、遅刻した！？ てめえ！？」

「365日を三年間だから…」

「てめえ、遅刻しなかった日がねえのか！？」

元ボクサーのパンチを、ことごとく、身体全体で避けながら屁理屈をこねる隼を見て、皆が呆れていた。

最初のうちは、その工事長のパンチを受けまくった隼だが、今では、目をつぶっても避けられるくらいになり、しばらくすると、工事長が息切れをして殴るのを諦めるのが定番。

轟は、やれやれ…とため息をついた。

昼下がり。あのゼファーナ春日は自宅のアパートで、チャーハンを作っていた。フライパンを動かし、ご飯を炒めていた。

そして、時折、はあ…、とため息を吐いた。

財布は見つかったが、中身が綺麗さっぱりなくなっていた。金はもちろん、せっかく貯めたポイントカードや、パン祭りの皿のシールも。

「この世に、仏も神もないのか…」

チャーハンを皿の上にのせると、タイミング良く、テーブルに置

いた自分の携帯電話が鳴った。夏海アルゼからの着信だ。

皿をテーブルに置き、携帯を開くと、彼女のメールが一件。先日、自分が捕まえた『アンサーズ』のメンバーの口を、彼女が割ることが出来たらしく、様々な状態がメールに表記されていた。

血に温度があるのか解らないような彼女がどうやって、男の口を割らせたんだろうな…、と思いながら、チャーハンを口に入れると卵の殻がガリツと鳴った。

夕方、とある剣道団体が練習している市内体育館に夏海アルゼの姿があった。館内に入ると、中で剣道の練習をしていた女子高生の多摩雪乃が胴着姿で現れた。

「どっ…、どちら様で…？」

汗を拭きつつ、雪乃は初対面のアルゼの顔をジロジロと凝視した。アルゼは雪乃のことを知っていたが、なんで、こんなに顔を凝視されるのが解らなかった。更に、雪乃の背後の戸の隙間から覗き見してる高校生男子達の姿も気になった。隙間から、またカタナの女かよ…、とか、凄い美人だなーとかの声が漏れる。

こんな騒がしいところに奴は住んでるのかと、アルゼは眉をひそめた。

周囲から妙な視線を受けながら、雪乃から館内の業務員室に案内されると、そこを城に暮らしている冬風カタナの姿が現れた。

「よお…、どうした…」

業務員室の畳の上で、横になり週刊誌をめくりつつ、甚平姿で腹

を搔きながら、カタナはアルゼに挨拶した。

「ちょっと！あんた、きちんと挨拶なさいよ！お客さんなんだから！」

と雪乃に叫ばれ、カタナはめんどくさそうに起き上がった。
すると、アルゼは雪乃の方に首を向け…

「すまないが、外してくれ…。彼に話がある…」

と冷たく彼女をはらう。

そう言われ、雪乃は、でっ！？と大きく声を漏らした。半泣きになり、アルゼの冷たい威圧感を前に言われるがまま、雪乃は身を離れた。

雪乃や周囲が居なくなったのを確認して、アルゼは部屋を閉めきり、あぐら姿のカタナの前で椅子に座った。
話を切り出したのは、アルゼからだ。

「お前、携帯ぐらい買え…。こうしなきゃあ、貴様と連絡が取れない…」

「住所不定だから無理…」

「随分、汗臭い、うるさい場所に住んでるんだな…。あの小娘、いつもあんな感じか？」

「嫌味言いに來たのか…。それとも、俺と寝に…」

なにか余計なことを言いそうな彼に、アルゼはコートのポケットから紙切れ一枚を出して投げ渡す。紙切れには、どこかの場所を示す地図が書かれていた。

「ゼファーナ春日が捕まえた奴の口を割らせた…。例のファンタジ

スタスーツの取引をした奴らのアジトだ……。頭の名は、『谷田部』
って名だ……。調べたら、ろくな経歴がない……」

彼女の言葉を聞きながら、カタナは真剣に地図に見入ったあと、
クシャクシャにして自分の口に放り込んだ。

「叩くのは、本日の零時だ……。ゼファーナ春日や、秋羽隼にはすでに
連絡した……」

ベッ！と紙を吐くと、カタナは口を開く。

「こいつら、大量にファンタジスタスーツを購入したのに一匹しか
出てない……。しかも、簡単に口を割った……。それに、俺達も一応、
有名人だぜ……。『この世界』じゃあ……」

カタナがそう言うと、アルゼはクスツと笑った。カタナは、なに
かバカにされたみたいで、ムツと顔をしかめた。

「貴様や、ゼファーナ春日は説明が楽でいいが、秋羽のバカに説明
するだけで小一時間は掛かる……。奴の場合は、話を聞いただけで動
こうとする……」

彼女のこの言葉に、カタナは表情を直した。

「谷田部の経歴を見れば、こいつは知能的な面がある……。仲間の一
人を生け贄にして、こっちの出方を詮索してるだろうし、たぶん、
自分達のアジトが読まれるのも計算しただろう……」

「だから、アジトは罠だらけ……」

「ああ……」

ダメじゃん…、とカタナはため息を吐いて、背中から畳に倒れた。

「しかし…」

アルゼは不敵に笑みを浮かべる。

「奴らは、こちらの戦力が圧倒的なを知らない…」

「要するに、ただの力押しで行くのかよ…」

呆れながらもカタナは、また横になって週刊誌を読み始めた。

一方、その頃、業務員室外の道場では、彼女はカタナのなんなのかと、雪乃は不安になって練習に身が入らなかった。周囲のみんなが、また始まったよ…、と嘆く。

そして、夜。午後の九時。

市内駅前の居酒屋に、鈴木刑事の姿があった。カウンター席に座り、並々と注がれた酒のグラスを片手に酔う。腕の怪我のため安静にしろと言われていたが、病院から抜け出し、一人、酒に溺れる。ギブスが巻かれた右腕は痛むが、彼はそれ以上に、失恋に心を痛めていた。

「ちくしょう！女なんか！！女なんか！」

身のフリをわきまえずに暴れ散らす、鈴木刑事の横に、秋羽隼と轟の姿があった。

「うるせえな、あの野郎…、しばくか？」

隼は青筋を浮かせて、鈴木刑事を睨み付け、烏龍茶を飲みながら焼き魚をつつく。轟はグラスを揺らし、酒を口に含んだ。烏龍茶を自分のグラスに注ぐ隼を見て、轟は気付いた。

「お前、今日は呑まないのか？」

「ああ、このあと仕事だ」

そう言いながら、隼は烏龍茶を飲み干す。轟は、この仕事がないのかは解っていた。

「だからって、明日は遅刻すんなよ…」

「大丈夫だ。おやっさんとは、親子以上の仲だ」

隼はそう言うのと立ち上がって、さっきから暴れる鈴木刑事の元に歩み寄った。鈴木刑事は騒ぎのをやめると、急にカウンターに頭を置いて泣き喚く。

「てめえ！さっきから、うるせえんだよ！！周りが迷惑してんだよ！（特に俺が！！）」

見兼ねたらしく、隼が周囲を代表して彼に向かって注意した。すると、効果があったのか鈴木刑事は黙り始めた。

解りゃいいんだよ…、と隼が自分の席に戻ろうと振り返ると…。

「うっ！」

急に、鈴木刑事は真っ青な顔をして口を抑え、立ち上がった。

「えっ？」

隼が鈴木刑事の方を振り返った瞬間、悲劇は起きた。

深夜11時45分、零時の15分前。アンサーズのアジト近くのコンビニの裏。そこに隠れるように、夏海アルゼは黒いタキシードのスーツを着て携帯電話を握っていた。彼女は携帯電話を握る手をワナワナ…と震えさせている。

この時間は、攻撃開始前の集合時間。とくに、ゼファーナ春日、冬風カタナはスタンバイが出来て、アジト前に潜んでいるというのに、秋羽隼の姿は見えないどころか、なんの連絡もなかった。

「なにをやっているんだ…。あのバカが…」

アンサーズは暴走行為で有名でもあるため、車やバイクでの離脱もあるかもしれない。だから、今回は特に秋羽隼の力が必要だというのに、よりによって、遅刻で連絡なしとは…。

攻撃開始5分前、ゼファーナ春日の携帯から連絡が来た。作戦の最終確認と、秋羽隼が来たか？との電話だ。

「来てない…！貴様らで、零時ちょうどに開始しろ…。いいな…」

ブチッ！と電話を乱暴に切った。

そして、彼女は白い仮面を手にして、この場から去る。

アンサーズ、アジト前の廃ビルに潜むゼファーナ春日、冬風カタナ。二人は攻撃開始まで秒読みなので、仮面を被り、ファンタジスタスーツを始動させる。

ゼファーナ春日は、あの黒いボディスーツに黒い仮面。そして、

赤いマフラー。冬風カタナは着物姿に、赤い般若を被っただけであった。

「なんか、メチャクチャ、アルゼ機嫌悪かったんですが…」

携帯を懷にしまいながら、ゼファーナはカタナに話し掛けた。そう言われ、カタナは廃ビルの窓から覗く満月を見つめた。

「今日は、機嫌の悪い日なんだろう…」

カタナの言葉が理解出来ないゼファーナは、？を頭に浮かべ、腰にかけてある刀を抜いた。

開始まで、10秒前。

二人は廃ビルから身を乗り出し、アジトを駆け足で向かう。

「ゼファーナ春日、シュガーレスは先攻して叩きます！」

「冬風カタナは、サムライロジックで後方で、ハイカラに構える」

二人がアジトに足を踏み入れた瞬間、時計は、ちょうど0を告げた。

FLASH:03 「潜行・閃光・先攻」(45) (前書き)

かなりの不定期ですみません…。

FLASH:03 「潜行・閃光・先攻」(45)

「人を殴ったことは？」

「ありません」

電話越しに聞こえるその声に、僕は心を見透かされているようだった。

あれは、アルゼという名の少女と出会ってから、1日と経たない間のことだ。ライフコーポレーションとかいう会社の医務室のベッドで目を覚ましてから間もなく、彼女と、その彼女の叔父から電話を渡された。

電話の向こうに居るのは、彼女の兄、夏海エヌアル…。直接的に会ったことはない。これが最初で、今現在で最後の彼との接触だ。彼は質問ばかりを投げ掛けた。

「人を殺したいと思ったことは？」

「…、あります…」

「何故…？」

言葉が詰まった。

そう言われると、数々の苦しい過去がフラッシュバックした。

苦痛しか思い出せない過去ばかりが脳裏に浮ぶ。

「…合格…。君には…、世の中を破壊する資格がある…」

こうして、彼に認められた。

続けて、アンチヒューマンズが存在、夏海エヌアル、アルゼの父親がアンチヒューマンズに利用され殺害されたこと、ファンタジスタスーツについてを知らされた。

僕はゼファーナ春日の偽名と…、ファンタジスタスーツのシュガーレスを与えられ、アンチヒューマンズと敵対する人生を生きることに決めた。

このあと、同志の秋羽隼、冬風カタナと出会い…、徐々にファンタジスタスーツのシュガーレスが身体に馴染んで行く。

しばらくして、初めて、ファンタジスタスーツを悪用する人間と戦うことになった。

このとき、生まれて初めて、人を拳で殴った。血も体温もある人間を。

気持ち悪かった。

気分が悪かった。

嫌な気持ちだった。

自分をイジメ続けた者達は、こんな気持ちにならなかったのか…。こう思うと、憎しみが沸く。暴力を働く人間達に。

だから、僕も奴らに痛みを与えると誓った。

戦うことを選んだ。

いつの間にか、人を殴ることに抵抗なくなった。

.....

ゼファーナ春日は矛盾している。彼本人も気づいてはいる。だが、今は関係ない。

ファンタジスタスーツを悪用するアンサーズを目の前にしているのだから。

午前0時に開始されたアンサーズの隠れ家に侵入した、地獄同盟会のゼファーナ春日、冬風カタナは構える。敵のアジト。なにが出るかはわからない。

瓦礫ばかりの室内を見渡すシュガーレス・ゼファーナ、サムライロジックのカタナ。

0の刻とはいえ、あまりにも静かだ。遠くからの犬の鳴き声すら聞き取れる。

ここには敵が居ないのか…？

「すっ…」

ゼファーナは仮面の下で、一呼吸。

（待ち伏せ…）

ゼファーナは気付いていた。瓦礫の影や、壁の向こう、隅っこや角、ポツカリと開いた天井の穴などに、簡易型ファンタジスタスーツのアンサーズの人間が数名潜んでいる。肌に刺さる敵の視線がシュガーレスのスーツからの皮膚に感じると、マスクが拾う相手のかすかな呼吸音がゼファーナにそれを伝える。

当然、冬風カタナも気付いている。彼の場合は、ファンタジスタスーツではなく、歴戦の勘からだ。

影に隠れた敵に睨まれているのだから、下手に動けば囲まれる。いくら、相手のファンタジスタスーツの性能が低くとも、大勢を相手にするのは賢くない。

だから…。

「カタナさん…」

ゼファーナは、スーツの腰に下げている水筒ぐらいのサイズのポシェットに手掛けた。

「なんだ？」

カタナは木刀で肩を叩いた。

「ちょっと、眩しいですよ…」

ゼファーナはポシェットから、筒のような物を取り出し床に投げ付けた。

カッ！！

「ぐわっ！」

「なっ！」

「ひっ！」

床に激突した瞬間、筒が破裂。激しい閃光が飛んだ。

科学的な化合の反応からなる光は、真っ暗闇の廃墟を照らし、瓦礫に隠れた敵を炙り出す。さらには、こちらを睨んでいた相手の肉眼から一時的な視力を奪った。

「名付けて、シュガーレス・ストーン・フラッシュ…」

ゼファーナのシュガーレスの仮面の眼光部は、強烈な光が肉眼に

届くのを遮断した。そして、さっきの閃光で見えた敵の姿に向けて走り出す。

「うおっ！まぶしっ！！」

カタナはこの武器について、なにも聞いていなかったで、敵と一緒にフラッシュを食らって怯んだ。

ゼファーナは瓦礫で怯んでいる簡易型を纏うアンサーズのメンバー2人、見つけた。

「オラァ！！」

迷わずに、ゼファーナはシュガーレスの力で拳を振り、彼らの意識を奪った。

（容赦なんかするものか…、容赦したら…、こいつらは…）

自分にそう言い聞かせ、三人沈め、次に瓦礫に潜むメンバーの方に向かう。閃光が効いている間に、敵の数を減らさねばならない。シュガーレスのマスクの底の眼光を黒く染め、ゼファーナは拳を握る。

この廃墟から少し離れた場所に、一台のワゴン車がエンジンを掛けたまま、待機している。ワゴン車のフロントや、リアガラスには『アンサーズ』のロゴマーク。そして、大きなアンテナが。

車内には酒を片手に握る谷田部と、数人の取り巻きと姿があった。

「アジトに残った使い走りは、どうでもいい…」

口からこぼれる酒を拭いながら、谷田部は隣に座る女性の膝を撫でた。

彼は取り巻き達と車内にある大きなスクリーンを見つめている。分割したスクリーンには簡易型ファンタジスタスーツ数名と戦うシュガーレス・ゼファーナの姿が映し出される。明らかに今現在の廃墟のアジト内での映像だ。

あの廃墟には、数ヶ所、隠しカメラが張り巡らされている。そして、その隠しカメラからの映像を、ワゴン車のアンテナから受信し、谷田部らはこのワゴン車で観戦している。

谷田部は要らない部下達だけを戦わせ、自分は高見の見物をしていた。

「ふはは…、今戦ってんのは、噂の黒いスーツか…。なかなか激しいじゃないの…？」

各暗視カメラからの分割でスクリーンに映るシュガーレスの動きを、映画でも見ているかのような感覚で楽しむ谷田部…。

だが…、取り巻きの一人が違和感を感じた。

「あの…、谷田部さん…」

「あん？」

スクリーンでは、さっきの閃光から視力を取り戻し、シュガーレスと戦っている部下達の姿が映る。簡易型ファンタジスタスーツの部下達が、シュガーレスに向かっては殴られ、蹴り飛ばされる。

「あの木刀を持った般若の仮面の姿が見えないんですが…？」

谷田部が、酒ビンを口に持って行くのを止めた。取り巻きに言わ

れた通りに、谷田部は眼光を鋭くして、分割したスクリーンの映像を細かく見つめた。

さらには、取り巻きが言う。

「あの黒い仮面が潰した分を差し引いても…、明らかに人数減ってますよ…」

分割スクリーンに映るのは、廃墟に居る部下達が閃光から視力を取り戻し、シュガーレスと戦う映像ばかりだ。

だが、分割して室内を映し出しているスクリーンのどれか一つにも、カタナの姿が映っていない。潜入したところまでは、スクリーンに映っていたのに…。

すると…。

分割スクリーンの一つに、鬼の顔がアップで映った。

谷田部、取り巻き達の背中に悪寒が走った。

ブッ！

それを最後にスクリーンすべての映像が砂嵐に変わった。

「バカな！」

谷田部は驚いた。握っていた酒のビンを握り潰すほど。

なんと、廃墟に隠されたカメラすべてが破壊された。映像が受信されなくなったのだ。

しかも、あらゆる場所に張り巡らされたはずの隠しカメラすべてが、数秒足らずの時間差もなく同時に破壊された。隠し場所すべてが敵にバレたならまだしも、各場所に隠されたカメラすべてを同時に潰すのは、あり得ない。

中継先であった廃墟で、カタナがアンサーズメンバーの一人の首根っこを掴んでいた。カタナの身体中の皮膚は裂けていた。

そして、まるで空き缶をポイ捨てするかのような要領で、メンバーの一人を廃墟の瓦礫に投げ付けた。

「盗撮なんて趣味が悪い…。覗きとセクハラは堂々とやるもんだぜ…」

カタナは知っていた。隠しカメラの存在を。
だから、すべて破壊した。人間の眼では捉えることの出来ないくらいに超高速で動く謎の能力『神速愛』で。

超高速で動く力『神速愛』の能力で、カタナはカメラとアンサーズのメンバーを沈黙させた。敵は気付かない間に、気を失った。

だが、『神速愛』は超高速に動くゆえの空気抵抗などによる負担で、カタナの肉体にすぎましい負担を残すため、彼の身体にはダメージが残る。

しかし、彼が被っているファンタジスタスーツの般若の仮面、サムライロジックは肉体を再生させる能力があり、それが裂けた皮膚を修復させる。

超高速と、超回復。

この2つが冬風カタナの能力。

カタナは周囲を見渡すと、かなりの人数が倒れていた。シュガーレス・ゼファーナと、自分が倒した敵の姿だ。

「役割が終わったし…。あとは任せた…。ゼファーナ春日…」

カタナは、残ったメンバーをゼファーナに任せ、そのまま座り込んだ。

「バカな！バカな！」

ワゴン車のシートが壊れるほどに何度も何度も殴り、谷田部が取り乱す。取り巻き達は、そんな彼に怯み距離を話す。

不可解だった。隠しカメラを潜ませていたのがバレ、破壊されたのが。

何故、カタナは隠しカメラの存在に気付き、すべてを破壊出来たのか。普通なら隠しカメラがあること自体に、気付かない。

「バカな！バカな！何故、奴らに隠しカメラがあるのを解った！！何故、一瞬で破壊…」

すると、スクリーン用のスピーカーから、ガガッ！と粗いノイズが走った。

『バカ、バカ、うるさいぞ…、バカが…』

谷田部は取り乱すどころか、戦慄に身体が支配された。スピーカーから聞こえるのは、夏海アルゼの声…。

地獄同盟会…。

その名の通りに、アンサーズに地獄を見せた…。
一人以外…。

秋羽隼は、午後1時まで営業している健康ランドの温泉に居た…。本来の役割を忘れ、気持ちよさそうに温泉に浸かり、すやすやと眠る。

脱衣場近くのコインランドリーには、吐寫物を洗い流したファータジスタスーツ、ポニーポニックが乾燥機の中で転がる…。

そして、あの居酒屋では轟が、これは間に合わねえな…、と思いながら、酔いつぶれ吐き散らす鈴木刑事の介抱をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9848f/>

シュガーレス・ゼファーナ

2010年10月13日15時17分発行